

世界史の考え方 岩波書店

近現代の日本史・世界史を総合し、近代化、大衆化、グローバル化の歴史像を考える高校の必修科目が始まる。

シリーズ第一巻は中国史、イギリス史、アメリカ史、アフリカ史、中東史の歴史家とともに、近現代史の名著を題材に、歴史研究の最前線や歴史像の形成過程、概念に基づく比較、問いや対話による歴史総合の実践を示す。

第一巻は、このことを、歴史学の著作「歴史叙述」を介して考える実践として構想されています。

歴史学の古典としてみなが手にしてきたもの、それを旋回させた著作、そしてゲストの著作という三冊を原則とし、それを「対話」のなかで読み解く「歴史実践」の営みです。

取りあげる三冊は、できるだけ新書や文庫、あるいはリブレットの類から選び出すことを、これまた原則として心がけました。

思い起こしてみれば、私が学生であった一九七〇年ころは、「歴史学の名著」が課題図書として掲げられ、その著作をみなで読みあっていました。

近年では、残念なことに、そうした課題図書のリストも、さらには読書会もなかなか見かけなくなりました。

共通のテキストを読み、互いに「対話」することが難しくなっています。

しかし、「歴史総合」を一つの象徴的な現れとする、現在の歴史教育と歴史学の大きなうねりは、あらためて、歴史的思考の積み重ねの自己点検を促していると思います。

これまでの歴史学の思考と、歴史教育が実践してきた作法を学びながら、(いま)にふさわしい作法を作り出すときである、と感じています。

あらたな事態が感じられるからこそ、先人たちが向き合った「問い」と「作法」を検証し、「私たち」の「問い」と「作法」を練り上げていく営みを試みたいと思いました。

いま一つ、私が学生時代にあわせて言われたことは、歴史学にかかわる「理論」と「研究史」と「資料」を読むようにということでした。

私が立ち会っていた「理論」とは、その実、マルクス主義であり、現在とはその様相を大きく異にしています。「資料」という概念も大きく変わり、「研究史」も各人の問題意識によって様相が違って来るでしょう。

しかし、その点も含め、いまだに読む価値を有している歴史書があると思います。

そして、その歴史書には、(現代風に姿を変えた)この三要素が凝縮されていると、確信しています。

そのことを「対話」を通じて、議論し検討してみようと思いました。

幸い、お声をかけた五人の方々がこの営みに賛同してくださり「対話」をすることができました。

日ごろ、専門とされている地域や時代とは異なった歴史書をも精読していただき、それぞれの方が、歴史家として歴史に向き合う作法が示されました。

ご自身の著作に関しても、その問題意識を率直に語ってくださり、深い議論をすることができたと思っています。

結果的に、中国史、イギリス史、アメリカ史、アフリカ史、中東史を専攻する方々となりましたが、それぞれの観点から、日本の歴史事項にも言及され、対話ができたとともに、日ごろ日本の事象に閉じこもっている私には、大きな刺激となりました。

この得難い経験を、多くの方々と共有することを願い、「シリーズ「歴史総合」を学ぶ」第一巻として、刊行することとなりました。

鼎談の記録ではなく、共有のための素材の提供という点を前面に出し、編集の手が入っています。

この点、鼎談に参加してくださった方々、および読者の方々のご理解をいただけると幸いです。鼎談のならばは、歴史的推移 ― 世紀順になっています。